

『住吉物語』試論

——年立上の期日と改作姿勢——

豊 島 秀 範

一

『住吉物語』の名称を持つ諸本の群は、それぞれが示す激しい内容の異同ゆえに、先覚諸氏の懸命の努力にも拘わらず、一通りの系統論すらも、我々に与えてくれようとはしない。古本『住吉』は『枕草子』『源氏物語』などに既にその名を留めているように、平安時代の前期には確実に存在していた物語である。しかしながら、その古本『住吉物語』の内容を想定しようとするとき、土居光知説を承ける磯部貞子氏が、

徳川家本は文章内容とも頗る古体を存する本であつて、住吉物語異本群に於いて基準となるべきものであると見られる。……住吉物語の異本発展について、諸学者の説は流布本を中心的なものと見ているが、ここには徳川家本のような形の小さい、内容の単純なものが基準となったものであると考える。

(傍線、筆者)(注1)

として、文章内容の古体であることを様々な視点から検討を加えて「形の小さい、内容の単純な」「徳川家本」を古本とする説を強く主張するのに対して、桑原博史氏は、

おそらく古本住吉物語は、源氏以前の作り物語がほとんどそうであつたように、全体として歌の少ない、したがってそれだけ一つの静止した場面、源氏物語的な場面は多くはもっていない、筋本位の物語であつたのだろう。(傍

線、筆者)(注2)
と「全体として歌の少ない」「筋本位の物語」と観る立場はやや等しいものの、磯部氏が古体を保つとする絵詞本「徳川家本」については、

絵詞本の本文は、いうまでもなく省略化によつて成立している。(注3)

との立場に立ち、磯部氏とは、全く対立する見解を示しているのである(注4)。そしてさらに、諸本の中ではかなりの分量を有する「宮内庁書陵部蔵本」(千種本)と称している)や「大東急記念文庫蔵一位局筆本」に、古本の原形が最も伝えられている、と桑原氏は説くのである。

増幅化・縮小化という二方向の現象は、改作の方向が一定の傾向にあるのだと観る限り、同時に存在することは考えにくい。勿論、両氏の見解は、『住吉』の改作方向が必ずしもいずれかの一方にあるなどという皮層的なものではない。やや磯部氏には「徳川家本」をあくまでも古本の原形と観ようすることに固執している傾向が窺われるが、いずれにしても、図式上では全く対照的な見解が論としては可能な情況——少なくとも決定的な論証によつて一定の系統論を組み立てるだけのものがないという情況——があるということであり、それが現在の『住吉』研究の現状だということである。

以上のような現状を招来した原因は、研究者の研究手法に問題があつたからではなく、それはどままでに激しく、様々に改作されてきた『住吉物語』そのものにある。しかも、そのほとんどは、それほど時期を隔てずになされていることであ

る。『風葉和歌集』に採られている『住吉』の歌六首が、「徳川家本」や「国会図書館本」などには含まれておらず、本文が最も増大されたものと見なされている。「一誠堂本」「白峯寺本」「真銅本」にあるという事実によってもわかるように、これら三本の本文は、あるいはそれら三本の祖本となった本文が、遅くとも『風葉集』の成立した文永八年（一二七一）以前には成立していたということなのである。このことは重要な意味を持っている。その後も、それらの本文に改作者の手が加わったことは予測されねばならぬが、文永八年以前に、「徳川家本」から「真銅本」に近い形の本文まで、様々な形態の『住吉』が、時を同じくして世に存在していたと思われるからである。つまり、作品の局部的部分のみならず、作品全体が相当自由に増幅・縮小され、錯綜していたという状況を強く意識しておく必要があるということである。そのことを十分に念頭に置いた上で、それぞれの本文が作り上げた作品世界を捉え、改作を必要とする意識なり必要性なりを考えてみる必要がある。

以上のような理解の上に立ち、ここでは、最も本文が増幅され、それ故に原本の姿からは最も遠く、価値の低いものと考え思われてきている本文の一つである「真銅其策氏蔵奈良絵本」を初めとする第六類の本文を取り上げ、他の数本の諸本と比較しながら、改作の方法と姿勢とについて、年立上の期日などを手がかりとして、考察を加えてみたい。

〈表1〉

事 件	契 沖 本	十行古活字本	横 山 本	国会本（第一類）	千種本（第五類）
(1)中納言、姫君の入内を決議する。	九月にも成ぬ	九月にも成ぬれば		九月にもなりにけり	九月にもなりぬ
(2)中納言、その準備に没頭する。	霜月十日余りになれ は其出たちをのみ	霜月のことなれば其 出立をのみ	神な月もすゑになり ぬ	しも月のことなれば 其出たちをのみ	十一月の事なれば
継母のざん言。					
(3)中納言、入内をとりやめ、左兵衛 のかみとの結婚を考える。	いとよきこととおほ して霜月と定めてけり	いとよきことよとて 霜月とさためけり		いとよき事とおほし つゝしも月とさため	いとよき事なりとて 十一月とさため侍り けり

二

『住吉物語』の内容は、継母の数度の策謀に陥った姫君が、この世に絶望し、乳母子の侍従と共に尼になることを決意して、住吉に住む尼君の許へと都を去っていくまでと、観音の示現を得た少将が住吉の地に姫君を見出だして結ばれ、都に戻って幸せを得る結末を迎えるまでとに、二分することができる。

前半は、姫君の母宮が死ぬ間際に言い残した「姫君の宮仕え」がいつ叶えられるかが関心事であり、父中納言が霜月の五節の際に入内を計画したところから、その月日をめぐって緊迫したストーリーが展開される。そしてその月日が進行する間隙を縫う形で、諸本間に物語内容の増減が現れているのである。特に「真銅其策氏蔵奈良絵本」（以下「真銅本」と略称する）は、年立を変更し、細分化する工夫を凝らすことで、物語の改作を試みている。つまり、年立を軸とする改作の特徴が見られるのである。以下、その点について述べてみよう。

ところで、年立上の矛盾については、桑原博史氏が「無窮会図書館蔵契沖本」を初めとする、いわゆる桑原氏の分類による第四類の諸本に、姫君の乳母の死後、父中納言が姫君を入内させようと思いつく場面以降にそれが存在することを指摘している。まず、その点から触れてみよう。該当部分を引用する。

(4) 継母、むくつけ女の兄に姫君をぬすませようとする。

姫君、住吉の尼と文のやりとりをする。姫君、中の君たちに別れをつける。

(5) 姫君、住吉にのがれる。

神な月廿日比なと聞 ゆれは十日よりさき	神無月廿日比ときこ ゆれは十日よりさきと	さあもんのかみにし も月廿日ばかりとき こゆそれよりうちに	今月はつか比よりも さきに
ころは長月はつか余 りの有明	比は長月の廿日あま りの事なれば	ころは神無月すゑな るに	かみな月廿日あまり の事なれば
			十月廿日あまりの事 なるに

(傍線、筆者)

〈表1〉でわかるように、中納言が姫君の入内を思い立って以後、姫君が住吉へと逃れるまでの期間が、「国会本」や「千種本」では九月初めから一〇月二〇日余りまでの約二か月間であるのに、第四類の「契沖本」・「十行古活字本」では、九月初めから同月二〇日余りの二〇日間程になっていて、そのような短期間に、これら一連の事件を内在させるのは無理であること。この誤写の原因は、(4)のへ継母がむくつけ女の兄に姫君を盗ませようとする事件の折に、姫君と宰相中将との結婚の日取りを、他の諸本では「霜月十日余りになれば」とあって、「霜月無月廿日頃」と誤認したことによる。更に、「契沖本」は、(2)のへ中納言が

姫君の入内の準備に没頭する場面で、「霜月十日余りになれば」とあって、「霜月十日余り」は姫君の入内予定の日取りであるのを、中納言が準備に没頭しているその時点での月日のこととしている。その後、姫君が住吉へ逃れるのが「長月廿日余り」と記されているのだから、年立の矛盾は明らかだということである。以上のことは桑原氏の説かれる通りである(注5)。

ただし、この年立上の矛盾は、桑原氏のように単純な「誤写」とか「この二つのミス」といった認識では済まされない問題をはらんでいる。その一つは、同じ第四類に分類された「横山本」には年立上の矛盾はないこと。勿論、桑原氏の分類は、所収歌数の多寡を基準とするものであって、必ずしも本文独自の特徴によるものではないことは氏の弁明の通りであるので、同類とは言え、「横山本」のような存在は当然あり得る。しかし、その一方では、同類の項に括られた諸本に

は、それなりの類似性が本文にも認められるとも説かれるのだから、「横山本」のこの年立上の記述は注目されよう。つまり、諸本の流れが相当に複雑であるということである。「横山本」のこの記述部分は、後に述べる「真銅本」とも関連しているもので、詳しくはそこで述べることにする。

二つめは、「契沖本」・「十行古活字本」などに認められる年立上の矛盾は、それらの諸本のみでなく、桑原氏の分類では歌数の最も少ない第一類の一つ「絵詞本」の中の「徳川家蔵本」にも存在することである。この「尾州徳川家本」は磯部貞子氏が古本『住吉物語』に最も近い形として、本文の質の良さを認めようとする内容をもつものである。そのような本文中に年立上の矛盾が存在するということは、軽視できない。「尾州徳川家本」の記述を、先掲の表に対応する形で示すと次のようになる(注6)。

- (1) の場面 へ年立の記述なし
- (2) 霜月にもなりぬればただ此御いそぎよりはかは
- (3) 神無月と定め給へり
- (4) 長月廿日頃なれば神無月十日よりさきと定めて帰りぬ
- (5) 神無月廿日余りのことなれば

右の年立を一瞥すればわかるように、月日の記述が、(2)11月↓(3)10月↓(4)9月20日頃↓10月20日頃の順序となり、(2)から(4)にかけて期日が逆行している。(1)の中納言が姫君の入内を決意する場面での日時、つまり、他の諸本では「九月にもな

りぬ」とある記述がない。乳母子の侍従が〈母の四十九日の法要〉を終えて姫君の所に戻る場面に「七月十日余りに参りぬ」とあり、その後入内の決意の場面に「今年の御せつ（五節）」とあるので、その間のことであることだけは知り得る。そこは良しとしても、(2)(3)(4)の場面の年立の矛盾は、単純な誤写の域を越えている。仮りに(2)の「霜月にもなりぬれば」は「霜月のことなれば」の誤写と認めたとしても、(3)と(4)には意図的な要素が感じられる。(3)(4)の記述のままでは、姫君は一〇月一〇日以前に「かずへのかみ」に盗まれていることになるので、住吉へと逃れる場面の(5)「神無月廿日余りのこと」という期日が活きてこないことになる。それ程複雑な年立でも文脈でもないのに、しかも分量の極めて少ない「徳川家本」にこのような矛盾が含まれていることは、殊に他の諸本の多くが物語場面の展開上重要なポイントとして厳守している期日であるだけに、「徳川家本」の質について疑念を抱かせる要因となる。同様に年立上の矛盾を持つ「契沖本」「十行古活字本」なども全く異った期日であり、無論その他の諸本とも違っていて、年立上の問題から見る限り、「徳川家本」は孤立している。そのことは必ずしも古本の姿を示すが故の時間的な問題としてだけでは片付けられない情況が存在したことを推測させる。

月日の誤記は、単純な誤写による場合が当然予想される。侍従が母の供養を終えて中納言邸に戻る所でも、「七月十日頃」とあるべきなのを、書き誤って「七月七日頃」などとする奈良絵本もあり、細かい点を言えばきりが無い。けれども「徳川家本」は、姫君の乳母（侍従の母）が死ぬ場面でも、

かくしつづ後いとど悩みまきりて、三月のつごもり頃にはなくなりぬ。

とあって、乳母は「三月晦日」に逝去したことになっている。言うまでもなく他の諸本では「五月晦日」「五月下旬」「五月末の頃」「五月三十日」などとあって、「五月」が乳母の死去した月として一致しているのである。実際に写本を見ているので何とも言えないのだが、「徳川家本」のこの部分が単純なる誤写なのだろうか。どうもそうではないように思えてくる。磯部氏も度々弁明しているように、「徳川家本」として古本そのものであるとは言っておられないわけで、後に手

が加わったとして、その時に書き換えられたとも考えられる。つまり、母の死を悼んで、三月から七月十日余りまで、三か月余りの長期間、喪に服していたとする思惑が作用したと考えればよい（注7）。逆に、古本の『住吉』がそうであったという考えは、全く他の諸本にその痕跡がないことから、無理であろうと思う。

以上、年立上の矛盾を「徳川家本」を中心にしながらふれてきた。「徳川家本」は磯部氏が最も古本に近い形のものとして様々な角度から主張を繰り返してきている本文だけに、年立上の記述という若干の部分についてはあるが、固執せざるをえないのである。その背後には、古本『住吉』の実態を知りたいという思いが、当然ながら私自身の裡にもあるからである。後に述べる「真銅本」などに見る意識的な年立の変更を考慮すると、「徳川家本」にも改作者の意図が少なからず投影されていることは推測されるのである。磯部氏の「徳川家本」に寄せる一途な思いは貴重なものではあるが、やや性急な見通しのようにも思われるのである。

三

ところで、『住吉物語』には姫君が住吉の地に逃れるまでの物語前半部分において、物語の改作の姿勢と絡んで年立上の問題が存在する箇所が他にもある。以下、その点について述べてみる。まず、主な年立の記述を表によって示してみよう（注8）。（表2の中で空白の部分は、その場面に相当する記事が無いことを示している。）

すでに年立上の矛盾については、第四類の「契沖本」「十行古活字本」に関する桑原氏の指摘を承けて、「徳川家本」をそれに加え、主に「徳川家本」に焦点を絞る形で意見を述べてきた。ここでは、「真銅本」を中心とした第六類の年立上の記述に注目することで、その改作態度を考えてみたい。

まず、〈表2〉に従って、(1)(2)(3)の場面を取り上げて、多少説明を加えてみよう。

(1) (3)は、姫君が中納言邸に迎えられ、その姫君の許に四位少将からの文が届

〈表2〉

	尾州徳川家本	(第一類) 国立国会図書館 蔵、吉野弘隆旧 蔵本	(第二類) 住吉神社蔵袋綴 写本	(第三類) 刈谷市立図書館 蔵本、東京教育 大学文研究室蔵 本	(第四類) 無窮会図書館蔵 契沖本	(第五類) 書陵部蔵写本	(第六類) 真銅其策氏蔵本
(1)中納言、姫君を迎える日を決定する。	卯月の十日になりぬれば渡り給ひぬ。	四月十日頃と定めて、	月の末頃と定めて、	又の月十日と定めて、	正月十日と定めて、	神無月十日頃と定めて	この月十日吉日なり、その日渡し奉るべし、(二月彼岸頃に渡る)
(2)四位少将、女房筑前を介して姫君に最初の文をおくる	十月ばかりのことなれば、もみぢ重ねの薄様に、	神無月の初めなれば、もみぢ重ねの薄様に	冬の初めのことなれば、もみぢ重ねの薄様に	九月十日余りの事なれば、もみぢ重ねの薄様に	十月ばかりに、紅葉重の薄様のいたうこがれたるに	神無月の頃にや、もみぢ重ねの薄様に	九月の比の事にや、もみぢ重ねの薄様に
(3)少将、継母の策謀により三の君と結婚させられたことを知り、侍従に会い、思いを告げんとする。	冬にもなりぬ。……いかに侍従に会ひ、……せめて聞えんと	冬にもなりぬれば、何ともして侍従に会ひて、	秋もすぎ冬にもなりければ……せめて侍従になりとも会ひて、	神無月十日余りの頃にや、雪をもしろく所々にたまりたる折しも、少将侍従に物言はんと	冬にも成ぬ。侍従に会いて物言はんと思ひて、	冬にもなりぬ。思しめす程のことを書きつつ、	かくて月日も過ぎゆく程に冬にもなりぬ。せめて侍従に会ひて一はしかうと言はばやと、
(4)姫君・中の君・三の君、嵯峨野に出かける。	正月廿日余りの頃、	正月中の十日余りの頃、	正月廿日余りの事なり。	今年は既に暮れにける。あらたまの年立返へる、	正月二十日余りの頃、	正月廿日余りの事にや、	正月廿日余りの頃、
(5)嵯峨野で姫君を見た少将は、一層恋情がつり、歌を贈る。						四月にもなりぬれば、卯の花折りて、	卯月にもなりぬ。青薄様に下絵かきたる紙に、
(6)少将、また姫君に文をおくるが、姫君からの返歌はない。				(年立上の記述なし)	五月五日、菖蒲につけてつかはしける。	五月にもなりぬ。菖蒲重ねの薄様に、	五月にもなりぬ。少将菖蒲重ねの薄様に、
(7)少将、恋情に耐え切れず、月の夜に對の方に行き立ち聞く。					同十日余りになりて、月のあかるけるに、		

(8) 姫君の乳母(侍従の母) 病となり、問もなく死去する。	三月のつごもり頃に、はかなくなりぬ。	五月のつごもりの頃、乳母はかなくなり……	五月下旬とかやに遂にはかなくなりにけり。	その後……つあにはかなくなりける	五月の末の頃、はかなき世の夢となりにけり。	五月つごもり、はかなくなりぬ。	五月卅日とかやに、遂にはかなくなりにけり。
(9) 七夕の日、少将、姫君の住む西の対を通り、歌を詠じる。							ほどなく七月七日にもなりぬれば、
(10) 侍従、故母の法要を終えて、姫君のもとへ戻る。	忌み果てぬれば、七月十日余り参りぬ。	営み果てて、七月十日参りたれば、	とかくする程に七月十日余りにもなりぬれば、	仏事のわざども営み果てて……七月十日余りに……まかりければ、	やうやう日数へて、姫君の御方へ参りけり。	七月十日頃に四十九日過ぎぬれば参りけり。	やがて十日余りにもなりぬ。侍従、姫君へ参りぬれば、
(11) 姫君、久しぶりに侍従と語る。	秋の月いと長きに、	はつ秋の景色、月の色さへいと物哀れなるに、	はつ秋の月、物あはれなる有様を、	はつ秋の月いとあはれなる夜、	初秋の月はいとあはれなる夜、	はつ秋の月、いとあはれなるに、	
(12) 菊の宴の日に、少将、姫君に歌をおくる。							月にもなりぬ。九日の朝、菊の少しうつろひたる一房につけて、
(13) 中納言、姫君を今年の五節の折に入内させようと決意する。	今年の御せつに、	九月にもなりけり。……今年の五せちに、	九月にもなりぬれば……今年の五せつに、	今年の御せつに、	九月にも成ぬ。……今年の五せちに、	九月にもなりぬ。……今年の五せつに、	神無月にもなりぬ。……このせちに、
(14) 中納言、姫君入内の準備に没頭する。	霜月にもなりぬれば、ただ此御急ぎより外は、	霜月のことなれば、その出立ちをのみ、	霜月の事なれば……姫君の出で立ちをのみ、	十一月の事なれば、この出で立ちをのみ、	霜月十日余りになれば、其出立ちをのみ、	十一月の事なれば、この事のみ、	中納言は、うち参りの事いそぎ給ふ。
(15) 姫君の入内を断念した中納言は、兵衛の督との結婚を決め、継母北の方に告げる。	神無月と定め給へり。 (故内大臣の御子・左兵衛の佐。二四、五歳)	霜月と定めつつ、(故内大臣の御子・宰相の中將。二四、五歳)	霜月の頃と定め給ひて、 (大臣の御子・宰相兼兵衛の督) 二四、五歳)	霜月に定めてけるを、(故内大臣の御子・中納言兼兵衛の督。二五、六歳)	霜月と定めてけり。 (内大臣の御子・宰相兼左兵衛の督。二五、六歳)	十一月と定め侍りけり。 (故内大臣の御子・宰相兼兵衛の督) 二五、六歳)	(故大臣の御子・宰相兼兵衛の督。二五、六歳)
(16) 中納言、姫君を兵衛の督と結婚させる事を、侍従に告げ、故母	左兵衛の佐へと思ふなり。	来る月に、中將にと思ふなり。	ただ霜月に、兵衛の督にておは	兵衛の督にと思ひ定めて、	たたむ月に、左兵衛の督と思ふ	十一月に兵衛の督と思ふなり。	兵衛の督を呼び奉らん。

宮の里邸三条堀河を準備する。

(三条堀河)

(三条堀河)

する人に、

(二条堀河)

(三条堀河)

なり。

(三条堀河)

(三条堀河)

(三条堀河)

(17) 兵衛の督の要請で、中納言、姫君の結婚を霜月とする。

兵衛の督の方よりは度々早められければ、中納言、霜月と定め給ふ。

(18) 継母、むくつけ女と共謀して、姫君を盗ませようとする。

長月廿日頃なれば、神無月十日よりさきと定めて、

(年立上の記述
なし)

来月廿日頃の事なれば、それより十日比とさきやくを、

またの月廿日なれば、同じくは十日頃より先にと、定め侍りける。

神無月廿日比なると聞ゆれば、十日より先と定めて、

来月廿日頃に……合わせ給……この月たば三条へ移り給ふべし……一日二日の頃は……と言ひ定めける。

(19) 継母の策謀を知った姫君は、都を去ろうと、侍従を促す。

〈本文欠し〉

(年立上の記述
なし)

この月もたちぬべし。

(年立上の記述
なし)

此月も終ちなん。いかにもく急ぎてはからふべし。

(年立上の記述
なし)

この月も終ちなん。急ぎはからうべし。

(20) 中納言、姫君を訪れ、三条堀河邸に近く移すことを告げる。

(年立上の記述
なし)(年立上の記述
なし)(年立上の記述
なし)(年立上の記述
なし)(年立上の記述
なし)(年立上の記述
なし)

来月十日、三条へ渡し参らせ候べし。

(21) 姫君・侍従、尼君に伴われて、ひそかに都を去り、住吉へ行く。

神無月廿日余りのことなれば、

神無月廿日余りの事なれば、

神無月廿日余りの事なれば、

(年立上の記述
なし)

ころは長月廿日余りの、

十月廿日余りの事なるに、

ころは神無月廿日余りの事なれば、

く。だが、継母の策謀に陥った少将は三の君と結婚。後にそれを知った少将は、姫君に寄せる思いを侍従に訴えるという筋である。以上の(1)(2)(3)の場面での年立上の記述を一瞥してわかるように、(1)の〈中納言が姫君を迎える〉予定の期日が様々に乱れていることがまず目につく。「住吉本」を除くと「十日(頃)」の記述は一致するものの、何月の事なのかは全く絞り切れない。〈予定日〉と〈実際の

移動日〉との違いはあるが、「徳川家本」と「国会本」とは「四月十日(頃)」とあって、月日が同じであることは注目される(注9)。しかし、そのことだけでは、それが占本に本来あった期日であると速断することは無理だ。また、「住吉本」の「月の末頃」、「刈谷本」の「又の月十日」では全く不明である(注10)。この点については、より多くの諸本を見る必要性を痛感する。「書陵部本」の「神無月十日

頃」は不審。これでは、次の(2)の場面でも「神無月の頃にや」とある期日との関連が不自然になるからである。(2)の記事に引かれて(1)の記述がなされたようにも思われる。「真銅本」の「この月十日」も不明だが、そこを明確にさせようとして、

二月の彼岸の頃になりければ、いま二人の姫君達の袴着のつゝでにと思して、渡し給ひけり。

と「二月の彼岸の頃」という特定の期日を入れることになったのだらう(註11)。本来は、「正月」か「四月」のいずれかではなかったらうかと推測されるが、正月とすると、(2)の場面での「十月ばかり」までには期間が開きすぎるという合理的判断が、あるいはなされたのかも知れない。

物語が開始されて早々に、諸本のいずれにもある最初の年立上の記述であるにも拘らず、かくも様々な期日がなされていることは極めて不思議なことである。『住吉』がいかに長大なタイムトンネルを潜り抜けてきているか、同時に、どれほど多くの人々の手を経て来ているかを、以上の一事をもつてしても、充分に感じさせられる。

さて、四位少将が女房筑前を介して姫君に最初の文をおくった(2)の場面だが、他の諸本はほぼ「十月頃」で一致しているが、「刈谷本」と「真銅本」のみは「九月」と明記され、一か月早められている。「刈谷本」「真銅本」がこの場面を「九月」のこととした理由は、次の(3)に至ると「冬」の季節を迎えるのだから、それよりも早い時期でなくてはならない、といった考えが働いたからであろう。(3)の場面では、諸本のいずれもが「冬」を告げているのだが、「刈谷本」「真銅本」を除けば、(2)で既に「十月ばかり」「冬の初め」などと記されていたのだから、自然な季節的時間の推移が物語にも反映されるとする見方からは、決して妥当な年立ではない。むしろ、「刈谷本」の、

(1)又の月十日↓(2)九月十日余り↓(3)神無月十日余りの頃
という記述、及び「真銅本」の、

(1)この月(二月と推定)十日↓(2)九月の比↓(3)冬にもなりぬ
とする時間的推移の方が無理がない(註12)。これを「刈谷本」「真銅本」の改作者

の原本の記述を無視した合理的な処理と考えることもできよう。あるいはそうかも知れない。だが、もしそうだとすれば、「住吉本」の、

(2)冬の初めのことなればもみち重ねの薄様に↓(3)秋も過ぎ冬にもなりければ
といった不条理な期日の記述に象徴される内容を持つ他の多くの諸本を改作した者の意識とはいかなるものであったのだろうか。

年立上の期日に不自然な点が無ければそれでよいというわけではない。祖本と目される本文には無理な時間的記述が有り得ないはずだと言いつもりは毛頭ない。逆に、古本なるが故に、錯綜した記述もあるのだという迷信的思考にも与しない。「徳川家本」などのように、一定の本文を受けて絵が配置されるという、ほぼ完成された絵詞本にみられるように、文章と絵とによってそれぞれの場面がまとまりと、いささかの独立性をもつて切り取られ語られているということを考慮すると、年立上の不自然さも解消されるのかも知れない。つまり、「住吉本」の如く(2)「冬の初め」↓(3)「秋も過ぎ冬にもなりければ」とあっても、その記述がそれぞれの場面の冒頭に、やや新たな書き出しの如くにあったとすれば、場面ごとの時間的推移の不自然さも、絵を見ることがよって寸断され、それほど気にならないで済むということである。むしろ多少重複している方が理解し易いという作用すらあったのかも知れない。そうとでも考えなければ、(2)↓(3)への不自然な時間的推移を内在させている諸本がほとんどであるという状況は理解できないであらう(註13)。

だが、「刈谷本」「真銅本」の改作者はその不条理を改めている。そこに改作者の意識を窺わせる。特に「真銅本」は、先に引用したように、姫君が中納言邸に迎えられる期日を「二月彼岸頃」と設定し、その時に他の二人の姫君達の袴着の場面を新たに加えることで、華やかな雰囲気の中で、成長した姫君達を印象づけ、姫君いかにこの世の人とも覚えす。三の君・中の君もよけれども、この君ほどはなかりけり。

と記すことで姫君の美質を絶賛することにより、以後に展開する継子譚での姫君の苦境との、落差の大きさを目論んでいる(註14)。

加えて、袴着の場に参集した人々をして、

いつくしき姫君持ち給へる中納言かな、と(婦りの)道すがら、ほめ合へり。
と前途明るい中納言・姫君像を作り出す。その仕上げは、袴着の場ではのかに姫君を見て姫君に心を魅了される、侍従の君(宰相の御子)と蔵人の少将(左衛門督の御子)という、二人の貴公子の登場を記すことである。翌年の九月に、中の君の夫・兵衛の佐が、西の対で姫君を垣間見てその美しさに心奪われ、歌を贈る場面があるが、それらの男性の登場は桑原氏の言う「少将と姫君とだけの純愛物語の構成が大きくくずされようとしたもの」とか、「少将以外の求婚者を登場させて、竹取物語的な求婚譚にするか、求婚者同志の葛藤譚にするかどちらかの方向をめざしたものとおもわれる」^(注15)、というほどの深刻な意図は、「真鍮本」の改作者には無かったと思う。目的はそれらの男性を登場させることで姫君の美を強調することにある。美質が強められる程、姫君を開鏡する悲しき条件との間に落差が増大するからである。これらの要素は物語の原初的なものではなく、後の増補によるものであるが、「姫君と少将との純愛物語を最大限にひきのばした後に、なお、物語を豊富にするためのやむを得ざる手段」という側面のみの評価では不十分なのであって、年立上の記述に現れる意識と共に、姫君の美をより際立たせようとする意図に基づいてなされた一連の描写であることを認識する必要がある。

四

さて、再度(表2)に戻って、(4)～(7)の場面を見てみよう。中の君の提案で、姫君三人が車に乗って正月二〇日過ぎに嵯峨野へ出かけ、小松を引く場面である。姫君三人の装束を初め、『住吉』の中でも一つの見せ場をなしている場面で、いずれの諸本にも描かれている。それは、「東京教育大本」以外は、「正月廿日余り」の頃とあって年立上の記述にもほとんど動きがないことから言えよう^(注16)。問題はその場面に続いて、姫君への恋情に身をやく少将の心情と行動とを描く部分にあることは、(表2)によって明らかであろう。「徳川家本」「国会本」

「住吉本」は、正月の嵯峨野のことから、場面は姫君の乳母の死に関する五月晦日(「徳川家本」のみは「三月晦日」)へと、五か月間を一気に飛ばしてしまっている。そこに「契沖本」は「五月五日」の菖蒲に関わる部分と、その五日後の「五月十日余り」の場面とを挿入する。さらに「書陵部本」と「真鍮本」には、「四月」の場面が増幅されているのである。「東京教育大本」は期日を「五月」と明記してはいないが、文を「菖蒲の根に結びつけて縁に落としかける」という場面があるので、五月の記事と考えてよい。

これらはいわば姫君と少将との純愛物語を最大限にひきのぼそうとした結果であるのだが、それを即座に『住吉』にあって後人の手が入った価値なき部分と決めつけて済ませるものではない。なぜなら、それらの増幅された場面を持つ「東京教育大本」以下「真鍮本」までの数本が、極めて新しい時期の改作であるということは言えないからであり、増補されたとは言え、その内容自体が特別に新しい内容のものだとも断言できないからである。

具体的に増幅されている状況を見てみよう。

(4)の場面で嵯峨野で姫君を見た少将は、帰郷した後も姫君の面影を忘れ得ず、その日の夕方に西の対を訪れ、侍従と語る(「東京教育大本」には語り合う場面がない)。この部分は「徳川家本」と「国会本」には無いが、「住吉本」以下の本文にはある。ただ、その折に少将の詠んだ歌の有無でみると「住吉本」にはなく、「東京教育大本」「契沖本」「書陵部本」「真鍮本」の四本となる。少将の詠んだその歌とは、「東京教育大本」で示すと、

(A)あはれとも言ふことのはの有らばこそしばし涙のこぼれ止まらめである。下の句が「書陵部本」では「落ちも止まらめ」、「真鍮本」は「涙もこぼれ止まらん」と、若干の差はあるが、ほぼ同じ表現と考えてよい。

この(A)の歌が、姫君へ寄せる少将の極まった恋情表現として提示されているのである。これは(A)歌を持つ四本とも共通している。相異した展開はここ以後に起こる。

まず「東京教育大本」では、少将は、誰と会うことも出来ず、歌を書いて「妾

戸の上に投げ入れて「帰っていく。次の場面は菖蒲の季節の五月へと移っている。

「契沖本」では(A)歌の直後は、

猶御返事なかりければ、月のさやかなる夜は、透垣^{すゐ}の上のはんもんに差して
帰^{かへ}り給ふ。

(B)しら浪の夜々ごとに立ち寄れど寄する落の無きぞ悲しき

と続いていて、(A)と(B)とは、同じ時に詠んだ一連の歌であることになっている。
この後に場面は「五月五日」へと移る。

ところが、「書陵部本」と「真銅本」とは、「契沖本」では同じ正月二〇日余りの夕方に詠んだ少将の歌である(A)と(B)との間に割り込む形で、四月の記事が増補されるのである。「書陵部本」の該当部分を示す。

四月にもなりぬれば、卯の花折^{おの}りて、少将、

(C)つれなさを思ひも知らぬ心こそみをうの花と言ふばかりけり

侍従にたぶ。戯れ給ひつつ、身もあへぬ御けしき、あはれ尽くしがたし。

ある時は軒端に夜を明かし、又かくなむ、少将、

(B)しら波の夜々ごとに立ち寄れば寄する落の無きぞ悲しき

場面はこの後五月へと移るのだが、以上の引用でわかるように、(A)と(B)の歌の間に、新たに(C)の歌を含む四月の情況を語る部分を挿入している。従って、(B)の歌も(C)と同じ四月の歌で、かつ(C)よりも後の別の場面で詠まれたことになってしまふ。本文の引用はしないが、「真銅本」においても、全く同じ情況を呈している。

(A)と(B)の歌は、「書陵部本」「真銅本」のように、もともと別々に詠まれていたものが、「契沖本」の如く(A)(B)が同じ場で詠まれた形のものへと改められたとは考え難い。(C)の歌が割り込んだと見るのが妥当であり、そうすることで少将が歌を詠む機会が増加し、姫君への恋情表現も強化されるというねらいにしよう。だが、それだけの理由で(C)の歌が割り込んだのではない。(表2)に示したように、「東京教育大本」以下の諸本に、(C)の歌の直後に五月の記事が増補されるのと同じ事情を考慮する必要がある。「書陵部本」から該当部分を引用してみよう。

かくしつ五月にもなりぬ。菖蒲^{あやふ}重^{おも}ねの薄様にて、侍従がもとへ菖蒲つかは

すとて、少将、

(D)心ざし深き沼々尋ねつつ引ける菖蒲^{あやふ}のあとの根を見よ

侍従、この御返事ばかりはと申けれど、よのつつましさと嘆き給ふ。

「契沖本」のみは更に「五月一〇日余り」の記事が続き、そこでも少将は詠歌しているが、(D)の歌は、第五句が「契沖本」で「根のもとを見よ」、「真銅本」は「根のほどを知れ」とあり、「東京教育大本」では「知らせじと忍ぶる時は菖蒲^{あやふ}草^{くさ}ねに泣く袖のほさぬ日はなし」とあって他の三本と比較すると表現に相当の違いはあるが、いずれも菖蒲に因んだ歌である。

つまり、(A)(B)(C)はいずれも恋情を訴える歌として人々の熟知している素材によっていること、加えて(C)と(D)の歌は、四月・五月の季節を象徴する素材を詠んでいるということが重要なのである。「卯月」の「卯の花」には「憂^{うれ}し」が、「五月」の「菖蒲の根」は「泣く音^{おと}」「深し」という意に通じていることは言うまでもない(註17)。平安時代末期の成立ではあるが、『狭衣物語』はその冒頭に、「くちなし色」に咲く山吹の花を見て、狭衣は、

いかにせん言はぬ色なる花なれば心の中を知る人もなし

と、「弥生廿日余り」の景に託して源氏の宮への恋情を詠んだのを初め、「五月四日にもなりぬ」その夕方、菖蒲をさげた賤^{しや}の男^{おとこ}を見ては、

浮き沈みねのみながるるあやめ草^{あやめ}かかるこひちと人も知らぬに

と充分に技巧を凝らした表現のもとに、菖蒲と恋情とを結びつけていた。果たして『住吉』のこの部分と『狭衣』の場面とがどれほど交渉を持っているかは不明だが、少なくとも、『狭衣』にも示されたような文学的雰囲気、『住吉』の改作者も意識して取り込もうとしていることは確かなのである。単なる姫君と少将との純愛物語のひきのばしを目指しているということではない。文学作品に定着している特定の季節なり素材なりを、価値あるものとして割り込ませていくことが、「書陵部本」「真銅本」の改作者の姿勢の中に、重要な条件の一つとしてあったのだと思う。そのことは次に述べることによって証明される。

五

再び〈表2〉に戻り、(8)・(9)までの年立上の記載に注目していただきたい。ここの物語は姫君の乳母（侍従の母）が病を得て五日晦日に死ぬ。侍従は四十九日の法要を済ませ、七月十日に姫君の許へと戻り、初秋の月の美しい夜、二人が久しぶりにしみじみと語り合うという筋である。ただし「真銅本」のみは、その間に(9)の「七月七日」の記事が挟まれ、また終わりの部分に(10)の「九月九日」の折のことが増補されている。それらの件について述べる前に、(8)・(9)の全体的なことについて触れてみたい。

(8)の姫君の乳母が逝去する期日が「徳川家本」のみに「三月晦日頃」という記述があることについては既に述べてきた。「国会本」以下はほぼ「五月の晦日」という所に落ち着いている。同様に、(10)の場面で侍従が故母の四十九日の法要を営み終えて姫君の許に戻るのも、「七月十日頃」という期日で動かない。この「七月十日頃」は、次の(11)の場面で姫君と侍従とが久しぶりに語り合う「はつ秋の月」とあはれる夜」とも呼応していて、年立上に揺るぎはない。

だが、些細な事ではあるが、乳母の死んだ五月晦日から、侍従の戻ってくる七月十日余りまで、はたして四十九日の期間が満ちるのであるか。「七月十日余り」は七月二〇日未満までを含むというのであれば日数は一応満たされるが、「十日余り」と記されれば普通は一〇日からそれほど日数を経ない頃を指すものと思われる。勿論、このよなことは物語の大筋に拘わる事柄ではないが、(8)の場面で〈表2〉に示したほとんどの本文に「五月晦日頃」とある中で、「住吉本」は「五月下旬とかや」、「契沖本」に「五月の末の頃」とあって、多少期日をぼかした記述があることが気になるからである。これは単なる表現のあやではないように思う。「契沖本」は侍従が戻る月日についても「七月十日頃」とせずに、「やうやう日数経て」と記しているのだが、それも同様に、四十九日の法要の日数を考慮に入れたが為に生じたことではなからうか。「徳川家本」が乳母の死を三月晦日としていることも、あるいはこのことと関連してのことかも知れない。「東

京教育大本」などは、乳母が死去した月を示さずに、「その後」とあるのみである（ただし「東京教育大本」は、このみならず、(4)・(13)・(14)の場面でも年立上の記述を記していないので、他の諸本と一様には考えられない）。このように年立上の記述に際しては、諸本それぞれに相当に配慮していることは明らかなのである。しかも、年立上の期日として用いられている月日が、一年のサイクルを考える場合に重要な月である五月・七月であることも見逃せない。それは九月・一月にしても同じである。そこで「真銅本」に話を戻して、七月・九月の記事が挿入されている件について述べてみる。

(9)の場面は次の如くである。

かくて、つながぬ月日なれば、ほどなく七月七日にもなりむれば、少将、又
 かくなん。

年を経て逢ふ事もなき恋路にぞうらやまれける今日の七夕
 と、うちながめて過ぎ給ふ。

恋する姫君一人のみが居る西の対を通りつつ、少将が恋歌を詠ずる、極めて短い場面である。歌は勿論七月七日の七夕に基づくもので、特殊な内容を詠んでいるわけではない。それにも拘わらず、物語の筋が七月に差しかかると、この種の場面を挿入せずにはおられないところに、「真銅本」の本文の特質が窺われるのである（注18）。

九月九日の(10)の場面には、その姿勢が一層明確なものとなっている。引用しよう。

月にもなりぬ。九日の朝、菊の少しうつろひたる一房に付けて、かくなん。

秋深き露も結ぶに八重菊のうつろふ色をいかでかは見む

とて、奥に、四季の草木は変われども、我が身一つはもとの身にして、と書きすきみ給へり。姫君は、御簾上げて、菊に綿きせけるを御覧じて、渡らせ給へり。

この場面の直前は本文が欠失しているために、筋の続きが不自然になっている。「月にもなりぬ」とあるのは「九月にもなりぬ」と記されていたのかもしれない。

い。次章で述べる⑬の場面の冒頭文が「九月にもなりぬ」で始まっているからである。それでわかるように、この冒頭文は、中納言が姫君の入内を決定する⑬の場面の書き出しだったのである。それを「真銅本」では、入内決定の期日を翌月の「十月」へと変更して、新たに「九月九日」の菊にまつわる物語を作り出したわけだ。他の諸本が姫君の入内決定を九月のこととしてはいいても、特にその月ゆえに物語が展開しているわけではないこと、九月を一〇月に変更しても筋に支障が生じないことなどが一か月早めた基底をなしているのだろう。だがそれ以上に、「真銅本」の改作者は、「九月九日」という月日に注目し、重陽の節を背景とした菊にまつわる場面を設定せんとする意識が働いたということである。七夕の件と同じ姿勢である。菊のうつろ。姿に少将の恋に苦悩する心情を重ね合わせるのは常套手段ではあるが、それでもこの場面の挿入を価値ありと見ている姿勢がある。業平の「月やあらぬ」の歌の下句である「我が身一つはもとの身にしてお」の表現を取り込んでいることも無関係ではない。そして、その一方では、長寿を保つ習俗とされた菊の着綿まで丁寧に書き込み、菊花を見ている美しい姫君の様子を描出してみせる。

それだけでは済まず、中の君の夫・兵衛の佐まで登場させてくる。

……つゝめでながら、対面申す、嬉しく、などとして、かくなん。

はしたかのかかる恋路の苦しさに

うつろひたる菊一房、これ姫君に参らせ給へ。今日ことさらよき事、菊の花、とたはふれつつ、かくなん。

菊も又同じ籬の菊なれど下の心はわれもうつろへ

とあるを、侍従とりあへず、かくなん。

くちなしの色に咲きたる花なればきくべきものとえこそ言はれぬ
祝いの花、とさぶらへば、姫君に参らせぬ。

鷹を追ってきて西の対に來た兵衛の佐という情況設定で、姫君を垣間見させ、その美しさに魅了されて歌を詠んだのである。歌の発想は少将の場合と同様である。兵衛の佐の突然の登場は、姫君たちの袴着の折に登場した侍従の君・蔵人の

少将と同様に、姫君の美しさを称賛する為であったことは既に述べた通りである。少将と兵衛の佐との葛藤を描こうとする意図があったわけではない。

侍従が応えて詠んだ歌に、菊花の色を「くちなしの色」とあるのは、先に述べた『狭衣物語』で、狭衣が山吹の花を見て詠んだのと同じ表現である。両作品の関連は不詳ではあっても、「真銅本」が『狭衣』に描出された抒情性と近い質のものを志向していることは確かだ。そしてそれは、「七月七日」「九日九日」という特殊な期日を設定することで成されているのである。これは『住吉』のみではなく、平安時代に成立した『源氏』や『宇律保』を初めとする物語の多くが保有する要素なのである。いわば年中行事を年立上の重要な期日として、更にはその場を有効に活用することによって、物語の場面も形成され展開されていくということである(注19)。

六

物語場面をさらに追うことにしよう。

〈表2〉の⑬の場の場面を一覧していただきたい。九月に、父中納言は姫君を一月の五節の際に入内させようと決め、その準備に没頭する。だが、継母とむくつけ女の策略により、姫君の入内は中止となる。そこで中納言は、姫君を今度兵衛の督と結婚させようとして、その日取りを一月に決定し、その旨を継母および姫君・侍従に告げ、故母宮の三条堀河の里邸に住ませるために修繕する、という筋である。

年立上の期日を見る限り、「真銅本」はここでも意欲的な設定を施していることは明白である。

「徳川家本」での⑭「霜月にもなりぬれば」↓⑮「神無月と定め給へり」という期日上の矛盾は、⑭の部分で「霜月の事なれば」とあるべき所を書き誤った単純なミスであり、それは「契沖本」の⑭「霜月十日余りになれば」の記述も同様であることなどは、既に桑原博史氏の指摘に基づきながら説明を加えてきたので、ここでは触れない。それ以外の本文には特に問題はないので、意図的な年立

上の改作を示している「真銅本」に焦点を絞ることにする。

まずその第一は、中納言が姫君を一月の五節の折に入内させようと決意した時点、他の諸本では「九月」であったのを、一か月遅らせて「十月」としたことである。「十月」とする方が入内までの期間が短くなり、緊迫感も加わるのだが、それはあくまでも結果的な事柄であって、一か月遅くなった理由は、前章でも述べたように、「九月」の場面を既に書いてしまったということに起因する。つまり、菊の月である九月を、有効に描いた結果、一か月の遅れが生じたということであり、改作者の明確な意識の反映である。

第二点は、父中納言が姫君の入内の準備に多忙な日々を送る(4)の場面で、他の諸本は入内の期日を「霜月」のことなれば」と明記しているのだが、「真銅本」のみにはないこと。入内は五節の際に行うことが既に(3)の場面と決定していたのであるから、五節とあれば一月の丑・寅・卯・辰の日であることは明らかなので、(4)において改めて断る必要はないということなのであろうか。そうだとすれば、五節についての知識が充分にあったということの現れなのかも知れない。いずれにしても改作者の強い意識が反映されていることは確かだ。

第三点は、姫君の入内が中止となり、一転して宰相兼兵衛の督(呼び名は諸本により様々)と結婚させることが決定するのだが、その際にも他の諸本(徳川家本)は例外)では「霜月と定めてけり」となっているが、ここでも「真銅本」はそれを記さず、姫君を兵衛の督と結婚させることを継母に告げた時も、当の姫君や侍従に知らせる際にも、その期日は明らかにされていない。(4)の場面に至って初めて、

さて、兵衛の督の方よりは、度々早められければ、中納言、霜月と定め給ふ。と明かされる。それも兵衛の督から早くしてほしいとの度々の催促があったのでという条件付きで「霜月」となったのだとする。中納言が一方的に期日を決めてしまう他の諸本と比較すると、実に効果的な日取りの決定である。

それだけではない。入内中止の後、兵衛の督が姫君の婿として浮上したのは、他の諸本では(不明な表記のものもあるが)中納言にその男の存在をほめかす

者がいたので知り得たとなっており、その直後に男の意志は示されないままに日取りまで決定されるのだが、「真銅本」では中納言が宮中で兵衛の督に直接会い、物語りのついでに姫君の事を語り、「をそれながら、参らせ候はや」と勧める部分があり、兵衛の督が承諾したことも記されている。更には、兵衛の督は「この程、上(北の方)に遅れ給ひて、寂しくをはせるよし」という、他本には認められない状況が付加されているのである。用意周到な場面の設定というほかはない。

一方、兵衛の督が姫君の婿と決定したことで、それを耳にした少将の嘆く様子を描き、さらに結婚が一月と定めたことで、少将は一層の悲しみを加えていくという効果も目論まれているのである(注20)。

七

さて最後に、〈表2〉の(4)の物語について見ていこう。表を見てわかるように、これらの年立上の記載に注目する限り、「真銅本」がいかに充分な配慮のもとに筋を進めようとしているかがわかるであろう。

(4)の内容は、姫君を兵衛の督に妻合わせるつもりであることを中納言から聞いた継母は、再びむくつけ女と共謀して、むくつけ女の兄で醜き老人・主計頭を用いて、姫君を盗み取らせようとする。『落窪物語』での典薬の助の事件に匹敵する場面である。主計頭による盗み取りの計略を心寄せの女房・式部から知らされた姫君は、兵衛の督と結婚させて三条堀河に住ませようと準備する父中納言の意向を裏切ることの罪深さを知りつつも、侍従の計らいで住吉の尼君の迎えを請い、度重なる継母の策謀から逃れて出家しようとする意志を秘めて、尼君・侍従と共に住吉へと密かに脱出する、という筋である。

継母がむくつけ女と共謀して主計頭に姫君を盗ませようとする(4)の場面では、「徳川家本」に「長月廿日頃なれば、神無月十日よりさきと定めて」とあるの

は、前後の年立上の期日からして無理である。「徳川家本」はこれまでも度々指摘してきたように、絵詞本としてはほぼ完成した姿と言われているにも拘わらず、年立上の期日の記載においては不思議なほど配慮がなされていない。先述したような多少の季節の重なりなどは、絵の存在によってむしろ効果的な作用も考えられるが、この場合は全くの矛盾であり、「徳川家本」の物語としての質も問われる結果になる。

「契沖本」についてもほぼ同様のことが言える。(14・15)の場面で期日の誤認を犯し、最後に掲げた(16)の部分では、姫君の住吉行きを唯一「長月廿日余り」とする決定的な矛盾をおかしている。本文を筆写したり改作したりする場合、複数の本文を比較しながら行われるとは必ずしも言えないであろうから、期日が矛盾していることに気づいても手の施しようがないといった情況も想定されよう。だが、「徳川家本」と「契沖本」には、その域を相当に越えて、年立上の期日にはほとんど無関心な改作態度なり享受態度なりがあったようにも思われるのである。

その点で「真銅本」「野坂家本」も同様)は実に緻密な配慮がなされていることが、(表2)を一瞥するだけでわかっていただけよう。まず、継母が二度目の策略を企てる(18)の場面を見てみよう。むくつけ女が、兄の主計頭に語るところである。

中納言殿の宮腹の姫君を……来月廿日頃に宰相殿のあはせ給べきよし定め給ふ。……この月経たば三条へ移り給ふべし。それよりうちに急ぎ給へ。……を(は)し所をも少ししつらいて、一日二日の頃は迎へ取り中べしとて言ひ定めける。

(18)の場面で「神無月にもなりぬ」とあって以後、月日の記述はなかったわけだが、現時点は一〇月である。それを承けて右の引用文を読めば、姫君の結婚予定は来月一月二〇日頃に予定していること。この一〇月が過ぎると三条邸に姫君は移るようになっていくので、一月一日か二日には盗み取れ、というのである。その後(19)の場面で、姫君の三条邸への移動は一月一〇日と中納言により示され、符合する。住吉へと脱出する一〇月二〇日余りの期日も有効に連繫してい

る。

「真銅本」に見られる年立上の起述の緻密さは、前章までにも綴々述べてきたように、「住吉」の前半部分において一貫して守られてきた特質であった。勿論、この特徴ゆえに「真銅本」が古本を継承する本文を他の諸本よりも多く有するとか、「住吉」の諸本の中で優位性を保持しているなどということを主張するものではない。また、出来ようはずもない。しかし、年立上の期日に乱れがないということは、むしろ物語の多くにあってはごく当然のことであったはずだ。矛盾が内在すること自体がおかしいのである。しかもそれが「徳川家本」を中心に集中しているということが、不思議でならない。乱れがあるゆえに古態を示しているということは意味を成さない。逆に、緻密に年立上の期日を配慮し、新たに年中行事などを背景とする特定の月日を設定していく「真銅本」などの姿勢が、すぐに新しい時代のものだとも言えないはずだ。それは「真銅本」一つに限らず、「書陵部本」「契沖本」「東京教育大本」などにも、「真銅本」ほど徹底されてはいないものの、ほぼ共通した方向で記載されていたからである。

八

かつて『住吉物語』に登場し活躍する女房や乳母などの女性に注目して、『住吉』が展開する物語世界の一端を述べたことがある(注21)。今回は『住吉』の前半部分について、主に年立上の期日をめぐる改作姿勢を述べてみたわけである。特に桑原博史・磯部貞子両氏の研究に導かれながらではあるが、様々な様相の諸本を持つ『住吉物語』とは、いったいどのような質の物語であるのかという素朴な疑問に基づき、桑原・磯部両氏がそれぞれに古本の面影を強く残していると主張される異なった系統の本文を私なりに吟味したい思いを抱きながら、まずは、最も分量の多い系統に属している「真銅本」が、どこまで物語を増大させたのか、それはいかなる姿勢と方法とに依っていたのかを明らかにしてきたつもりである。

その結果は、既に随所に指摘しておいたように、「真銅本」は確かに姫君と少

将との純愛物語を最大限にひきのばした形となつてはいるが、ただむやみにそれが行われているのではなく、綿密に年立上の期日を配慮した上でなされているということである。『狭衣』の冒頭部分を持つ抒情的雰囲気を意識的に取り込み、『宇津保』『源氏』などがそうであったと同様に、一年の月日の中で、五月・七月・九月を初めとする年中行事を背景とした場面を設定を意欲的に試みているのである。そのためには、年立上の期日も意図的に変更するのである。

「真銅本」のこの特質は、原本の姿を求めようとする研究の上には、ほとんど有効な要因とはならないものの、背景や年立上の期日を軽視して、ひたすら姫君と少将との純愛物語をあら筋化することを目指さず、抒情的で緻密な物語の世界を描いていこうとする姿勢は貴重なのではないか。しかも、「真銅本」ほどではないが、ほぼそれと同じ方向に増大しようとしている「東京教育大本」「契沖本」「書陵部本」の存在があることは無視できない。それぞれの本文の成立時期を捜す手がかりがほとんどない現状ではあるが、『風葉和歌集』に採用された『住吉』の歌六首が、「一誠堂本」「白峯寺本」「真銅本」などのいわゆる相当に増補された本文にのみ存在しているという事情を考慮すると、『風葉集』の成立した文永八年（一二七二）当時、すでに「真銅本」に匹敵するほどの本文の増大が生じていたということも推測されよう。

磯部氏による連歌の面からの考察もあるが（注2）、原文の姿を捜そうとする上において、『住吉』に対する我々の意識自体を、再度洗い直すことも必要のように思う。

注

- (1) 磯部貞子氏「住吉物語の研究——徳川家本を基準とした異本分類」（尾州徳川家本住吉物語とその研究、所収。七八～七九頁。笠間書院、一九七五・二）
- (2) 桑原博史氏「住吉物語の成立——古本住吉物語から現存本へ」（『中世物語研究——住吉物語論考』所収。六三頁。二玄社、一九六七・一一）
- (3) 桑原博史氏「現存諸本の成立と展開過程——第一類諸本の成立と展開過程」（注2 同書所収。一二五頁）
- (4) ここでは『住吉物語』について最も精力的に、かつまとまった論を展開している磯

部・桑原両氏の説を代表させた。だが、言うまでもなく、『住吉』の研究は、契沖・真淵の頃から始まり、昭和の初めに至ってその研究は詳細を極めている。研究者名やその内容は割愛するが、当然、両氏の研究もその成果を承けていることは周知の通りである。

- (5) 桑原博史氏「現存諸本の成立と展開過程」（『中世物語研究——住吉物語論考』所収、一九九頁）

(6) 本文の引用は、磯部貞子氏「尾州徳川家本・住吉物語とその研究」による。ただし読み易いように適宜漢字を当ててある。

(7) 服喪の期間については、『源氏物語』にもその用例は少なくない。例えば、紅葉賀の巻で紫の上の祖母尼君の死後「御服、母方は三月こそはとて、晦日には脱がせ奉り給ふ」と、紫の上は祖母の喪に三か月間服している。これは『喪葬令』に定められた期間である。だが、同じ祖母の死に際しても、玉璽の場合は藤袴の巻で祖母大宮が逝去した三月二〇日から八月一三日までの約五カ月間を喪に服しているなど、必ずしも一定ではない。『喪葬令』では母方のみを三か月と定めているのではなく、『服紀者曾祖父母外祖父母伯叔姑妻兄弟姉妹夫之父母嫡子三月』とあって死者の対象は広い。『住吉』では侍従の母の死であり、祖母ではないが、「徳川家本」のように三月晦日から七月一〇日余りまでの三か月余りを服喪の期間に当てることは、あるいは喪葬令の定めに叶っていることも考えられる。しかし、一方では中納言が北の方姫君の母を亡くしたとき、四十九日が過ぎるともう一人の北の方の許へ行っていることもあり、侍従の服喪の約三か月という期間が、古形を残すものだと考えにくい。因みに『源氏』では、妻の死による服喪の期間として、葵の巻で妻の上の逝去した八月二〇日余りから冬までの四十九日間を源氏は喪に服している。夕顔の死の際も、源氏は四十九日間の服喪。父母の死としては、権本の巻で父八の宮が逝去した八月二〇日頃から一〇月までの四十九日間、大君・中の君は喪に服し、宿木の巻では母藤室女御の薨去に際し、皇女の女二の宮は四十九日以後に宮中の父の許に忍んで行くことはあったが、翌年の夏までの一年間を喪に服する。総角の巻では一月の豊明の節会の直後に死んだ大君の喪に、妹中の君は二月初めまでの約二か月半ほど服しているなど、物語上のことではあっても、服喪の期間は決して一定したものとはなっていないのである。その中で「四十九日」までの服喪は厳守されている。以上のことから、『住吉』の「徳川家本」以外の諸本が、侍従の母の死を「五月晦日」として、「仏事のわざども営み果てて、侍従は七月十日余りに姫君の御もとへ」と戻ってくるということは、決して不当なことではない。

(8) この種の調査は本来はほぼ全ての写本を見た上で成さねばならないのだが、現在の私の状況ではそれは不可能に近い。表に掲げた本文は磯部貞子・桑原博史両氏が翻刻し発表された本文に基づいているが、必要に応じて、横山重校訂『住吉物語集（本文篇）』

〔鎌倉時代物語集一。大岡山書店。一九四三・一二〕、および、友久武文編『広本住吉物語集』(中世文芸叢書11。一九六七・一一)などに掲載されている諸本と比較していくこととする。なお、諸本の分類については、ここではそれ自体は問題とはならないが、桑原氏の分類に従い、その順序によって並べてある。

(9) 第一類「京都博物館蔵本」、第五類「白峯寺本」「神宮文庫本」も「卯月十日頃」。

(10) 第一類「成田圖書館蔵本」も「たんの十日」とあって、同系統の表現である。

(11) 同じ第六類の「野坂家本」にも「此月の十日吉日なり。正月の十日と定て、その日渡し奉るへし。……二月の彼岸の比なりければ、いま二人の姫君たちの御傍着のつあでにと思しめして」とあるが、此月・正月・二月彼岸との関係が混乱している。一方、第四類「横山本」では、「三月末つかたに」とあって、特異な期日の設定となっている。

(12) 「野坂家本」でも、(1)二月の彼岸比↓(2)九月の頃↓(3)冬にもなりぬ、と無理なく進む。

(13) 『住吉』の絵の問題だが、『住吉』が成立してそれほど年月が経たないうちに絵も描かれたとされているが、古本「住吉」は絵を持たず、文章の量も多くはない筋立て本位の物語であったという推測もなされている。そうすると、年立上の不自然さはやはり軽視できない記述であったはずだ。かつて触れたことがあるが、物語の場面の展開は、年月日の記述によって成されることが多く、『住吉』もその例外でないことは、表2によって明らかにされるからである。

(14) 中の君・三の君の系譜は、諸本の多くは物語の冒頭に示している。磯部氏は「徳川家本」にはその系譜が無いことから、「物語の冒頭にこの句があることは、物語の構成上、ワキ役の中君三君が、主人公の姫君よりも先きに物語に登場すること、主人公姫君の印象を弱くするのみである。この句はここにあつて唐突としているばかりで、何の働きをもしていない。無用の句である。」(注1同書、八六頁)と言われる。結論から言えば、どの立場に依るかでいかようにでも言える事柄だということである。どのように否定しようとも、諸本の多くが物語冒頭に系譜を持っている情況は無視できないし、逆に言えば「徳川家本」が特異な本文であるということである。『住吉』は姫君の純愛物語ではなく、考えようによっては実子の二姫が存在する継母の所に移るといふ情況こそが、『住吉』の本来の条件ではなかったか。ただ、物語量からすると「徳川家本」とは対極にある「真銅本」にも、その系譜が冒頭部分に欠けていることは皮肉である。どのような経路を経てそうなったかは不明だとしても、「徳川家本」と「真銅本」とには深い所で水脈を同じくしていることが窺われる。また、「真銅本」などが意識的に系譜を後ろへ持ってきたことも考えにくいので、系譜の位置を異にする二つの系統に分かれていったことが想像される。因みに、第一類「成川本」、第四類「横山本」にも二人の姫君の系譜は最初に記されていない。

(15) 注2同書、一八一頁。

(16) ただし、第一類「藤井本」と第四類「古活字版十行本」に「正月十日。余りの頃」とあって、その期日も完全に動きがないとは言えない。

(17) この四月・五月の場面に關しては、第四類「横山本」、第五類「白峯寺本」「神宮文庫本」、第六類「野坂家本」なども、四月・五月の期日を明記して、「書陵部本」「真銅本」などとほぼ同様の記述があることから、物語が増大化する上での方向性がわかる。

(18) 同様の期日上の描写と歌とを含む「野坂家本」も同質である。「野坂家本」は九月の場面でも「菊月にも成ぬ。九日のあした」とあって、「真銅本」と全く同じである。

(19) 拙論「源氏物語における年中行事の役割」(『国学院大学大学院紀要』第五輯、一九七四・三)。「宇津保物語における場面と時間——行事と歌群との機能——」(『弘前学院大学短期大学紀要』第十六号、一九八〇・三)。

(20) 以上の「真銅本」にみられる様々な特徴は、同じ第六類「野坂家本」においても全く同じことが指摘できる。また、兵衛督の要請で姫君との結婚の期日が定まるのは、「霜月十日比と定めたまふ」とある第五類「神宮文庫本」も同様である。

(21) 拙論「『住吉物語』の作品世界——躍動する女房たち——」(『弘前学院大学国語国文学会・学会誌』第9号、一九八三・三)。

(22) 磯部貞子氏「住吉物語と連歌」(注1)同書、所収。